

ある幼稚園の一日

つ　　ば　　な

朝清めのすんだ室の窓は全部あけはなれて、ピ
アノの上の籠には、つゆながらの、野ばらの花が
人まらがほに香ひこぼれてゐる。

キルク張りの床の上には、がつしりした木製の
八角テーブルが一個、まわりに同じ色の木製の椅
子が十六竝んで居る、テーブルの上には、角封筒
と小さい小包の箱が乗てゐる、うららかな初夏の
朝日が雑木林を通して、庭と云てとりたてゝ限つ
てはない自然の丘や畑つゞきに室の内外にみなぎ
つてゐる。いゝお日和だ、こんな日に先生がいら
つしやればいゝが「獨語つともなく思ふともなく
してゐると。

「おばさんく、みやげだ、鶏に」息せきながら

まるくよく肥つて、とび色に日にやけた兩手
を、そうつと、確かり組み合せてかけこんで來た
のは六歳にしては少し大きい男の兒、

「大層いそいで權ちやんなあに」

「うむ、けいろつかまへて來た、ビョン／＼て、
あそこの野らはねてたやつ、おらんとこの鳥はよ
ろこんで食ふけ、おばさんとこのにも食はしてみ
な、おれがやつて來らあ、まだ、だあれも東京か
ら來ねえか」

おばさんのうなづくのを見て「やつぱり一番だ
あ」男の子はうれしさうに裏の鳥小屋へかけて行
た、市内に居た時分鰻の頭やどぜうはよく買てや
つたけど蛙なんかをたべさせた事のないおばさん

は、

「今日も権ちゃんに、一つをしへてもらつたのね」と云ひながら權作の頭をそつとなでた。

「あばさん、あれあ 家からも みやげ もつて来たど、おらが生れた日だ云て お母アがあづき飯たいてくれたどから東京のおぢさんの分も云てたくさん握てもらつて来たど、おぢさん今日来るけ？」

「さう、そりあおぢさんがあよろこびなさるわ。きつといらつしやる。」

権ちゃんに失望させまいと思つて「きつと」と云ひながら自分の希ひも入れてあばさん自身も「先生は今日きつといらつしやる」と思つてしまつた。

「あばさん、おはようございます」玄關で聲がする。

「あ、芳子さんおはようまあいゝれんげを」と、芳子の後から年若い女中が何か云ひにくさうにし

て居る様子をみて、「義雄さんどうかなさつて？」

「はい一寸丸木橋のところて、あすべりになつて」「さう、ぢや風呂場の方へおまはり下さい」

「おそれ入ります、芳子さまは？」

「芳さんはお姉様だから、いつものやうに、そつとお一人で出来ますね」芳子の健康に異状のないのをたしかめて「今日はお畑で大根をうるぬきますから、はだしになつて、上衣もぬいてね」

黙てうなづいたまゝ、氣づかはしさうにしてゐる女中にはかまわずに芳子はさつさと玄關側の下駄棚に靴も靴下もぬいて入れ、上のきぎに上衣をかかけバスケットを食用棚におさめると身がなるになつて物置小屋の方へ素足でとんで行つた、年は春生れの七歳でも都會で深窓に育つた芳子が、はだしを何とも思はないまでになるにはずぬふんあばさんも骨を折たのだがこの一週間めき〜とその甲斐が表れて來た。

濡れた着物を小さつぱりと下も上も着更へた明

ちやんは、日あたりのいゝペランダで昨日河原から捨て来た石をならべて遊んでゐる、その中に五郎さん進さん百合子さん京二さん達も前後して来る。安さんはこの園に来てまだ三日目、病身で神経質で大人のやうに潔癖なこの男の子をどうかして自然の懷で健康に育てたい、のび／＼と活々した子供に育てたい、あけるから暮れるまで實驗室には入りきりの學者を父にもつた子供で、一人子であるといふ所から、安さんのお母さんの養育の苦勞は一通りではない、幸に、「自然に融合する事」を標語とするこの幼稚園をのぞましい郊外の自然の中に發見してお母さんは「嬉しさに高鳴る胸の鼓動は、少女の日にも経験したことのない位」と日誌に記したほどよろこんだのであつた。

「安さん、皆お畑に行きます、ほらおばさんも」
はだしになつたおばさんは、軽く促してみが、

だめてあつた。

「それじやお母さんも、ねおばさん、はだしはよい氣持ですこと、今日はお母さんもエブロンを持って來ました、」お母さんは手早く包の中から出して身じたくをし、足袋をぬいで庭に出た「ペランダで小石を積んでゐた四つの明さんが、「僕も」と云て素足でかけ出した。安さんは未だ動かない。

お母さんは、あせる氣を自ら制して何とかしてこの不自然な我子を動かさうと思案の末、「じやあ安はお留守番をしてゐらつしやいね、母さんはおばさんや皆さんと一所にお畑へ行て來るから、雲雀の赤ちやんがゐるかしら」「では陸子さん、安はお留守番をしてゐますからベビちゃんと一所に願ひます」と云て、心は十二分に我子の上に残しながらお畑の方へと急いで行つた。

陸子さんは近くの〇〇學園をこの三月卒業して兒童問題、婦人問題の研究に志しまづ幼児研究の

目的で、同時にこの園が草創の際であり、おばさんと呼ばれる實は睦子さんに取ての舊師の片腕になつて其勞を助けん爲に、進んで無給に嬰兒科をひきうけてゐるのである。ベビちゃんは七八丁はなれた處に、御兩親共市内にお勤めになるので、出がけにあづけてはかへりに伴れて行かれるのが例になつてゐる、この嬰兒科の唯一人の生徒さんである。腹まきと晒木綿のはだ着、その上に薄い毛のコンビーを着ただけ、まる／＼と肉づきのいゝ足を達者に運ぶ様子は誕生前の子とは思はれない。

「さあ、孝さんもこの上がいゝわ、今日はお家の中なんかにあちや勿體ない」と睦子さんが庭へ下すと、そこには小さい鈴のやうな、どうだんの花が一面にこぼれてゐる、小さいものによく眼をとめる幼な兒は、黙つてかゞんで花を拾ひはじめた、用意のいゝ睦子さんはポケットから元結を出し

て、孝さんが、全身の注意を地下と指先にあつめて拾ひ上げる花の一つ／＼を綴てやつた。

「安さん、あなたも通さない？」

無造作に元結を出すと、明ちゃんの積残しの石をしかたなしにいぢつてゐた安さんは、ツと立て玄關から靴をはいて廻て來た、とたんに音もなくこぼれ落ちた花が、かがんでゐる子のやはらかな頭の毛にとまつた。

「ハハハ、お姉さん、ベビちゃんの頭の毛に、」思はず破顔した安さんは、「僕、これを通してでもい

Sc 1

睦子さんは微笑みながら無言でうなづいて見せた。安さんは恐い物にても觸れるやうに、さうつと幼な兒の髪の毛から花を拾ひ上げた、何かさわられたので敏感な幼兒は二三度横に頭をよつた。

「痛かつたの、ベビちゃんごめんさい」不安さうにのぞく安に、にこ／＼と笑みこぼれてみせた

嬰兒の笑顔は安の顔にも、見守る人にも傳つて行く、と玄關の方に聲がする。

「小父さん、今日お話してね、お話のお土産持て来るつて、いつかお約束したんだもの」

「うむ」布袋さまのやうに子供の群にかこまれてうなづきながら、ほゝ笑みながら、ゆるやかに歩を運ぶ、「小父さん」を、

「小父さん、は、トロッコだ、さう皆で押して行かう、ゆるい丘の勾配を、ウン／＼と幼兒の群は押して来る。

「あら、先生、よく、思はず睦子は玄關の方へ小走で出迎へた。「まあ皆さんも」

「久しぶりで今日は生き返つた、丁度、今電車で、皆さんと一所になつて、いゝ日和です、どうです睦子さん、鶏百首ぢやなくて、子供百首でも？」

「ホ、先生、それどころぢやないんですの、百首どころぢやありませんわ、先生から机の上で話

は伺てゐたけれどこんな豊富な、こんな純な、涙ぐましい世界だとは思ひませんでした、私、歌へすぎて歌へない、歌へないかはりに、生きてゐる喜の實感を、しつかり、こうして大地を踏んでゐるやうに握つてます、机の上の生活では、とめどなく懷疑がわいて息詰るやうな苦しい生活が生れたのですけど、そして哲學よりも、ほんとうに今までと違つた、理論ではない、實在の信仰といふのでせうか禮讚といふのでせうか、近頃は、此世が、輝やかな天園か極樂のやうに思へますの、」

「睦子さん、その氣持、その氣持ですよ」「今日はちよろこびを言ひに來たやうです、ね」満足げに破顔した先生は今更のやうに身も心も希望にあふれかゞやいてゐる若い睦子の姿を、ポツチェリーのヴィナスの誕生の繪の前に立つた様な思で眺めてゐる。子供達は睦子や小父さんの話がわからないので、汗を拭きながら靴をぬぎ、先に來た子等の

上衣を見て、バスケットを食事戸棚に納めてから各自上衣を脱ぎ、素足になつて物置小屋へ行つた、箒を持つものシヤベルを取るものとりどり、小屋の横の小塗板に、

「ハタケニキマス。オバサン」と書いてある。

「畑だ、畑だ」一人が云ふと一人が「また小父さんを押しこよう」

「小父さんはこんどはベビちゃんとお遊ばふ、お姉さんと皆で行てらしやい」

「ぢやあ先生、御願ひします、さ、みんなで馳つこして行きませう、よいい、どん」

「私一ツと、元氣な秀子さんは男子達をはるかに追ひ越して先着した、

「おばさん！ あはようございます」

「あはよう、秀子さん、今いらしたところ？」

「え、小父さんも、電車で一所になつたの、みんないま來ますよ、おばさん、この土の低いとこね」

「おばさん、あはよう」おはようございます」

「あはよう、宏さん、豊さん、守さん、あはよう健ちゃん、道子さん、泰子さん、あやッ、おばさんはほんとうに驚いたのだつた。

はいつてからまだ三日、ことに神経質な、都會病を大人のやうにうけた安さんがこんなに早く土に親めやうとは思はなかつた。しかも素足でシヤベルを持って皆の群に加つてゐた。おばさんは奇蹟といふ字を思ひ出したりした、そして傍に立てゐる睦子さんの若々しい姿が、マドンナのやうに輝て見えた。

「まあ、睦子さん、安さんのえらくなつたことね」

お母さんは、あふれる喜をつゝみきれないで、黙て安さんを手招きして、

「雲雀の赤ちやんよ、そうつと、靜かに、土の低くなつてゐるところを歩くのよ、」

お母さんや安さん、と五六人が雲雀の巢を見に

行てる間に、おばさんと先に來た子達は箆にいつばいになつた、摘まみ菜を持って園の方へ歸つた、

「おばさん！おぢさん來たとか？ おれあ、今日は又お話さくだあ、もうせんの約束だつけなあ」「うむ、うれしいなあ」「うれしいなあ」と權ちやんを先に子供達の足どりは、すてにスキップになつてゐた。

月に一度か二度多忙な公務の暇に先生がこの園を訪はれる事は、先生御自身にとつて、またおばさんや睦子にとつてはなほさら、幼い群からも最も樂しみな事の一つになつてゐた。

小川で足を洗ひ、手洗場で顔や手を清めてゐるうち、芳子さんの女中さんはお茶の用意を手傳た。安さんが少しづつ、友達と遊ぶやうになつたので、お母さんは欣事場で、摘まみ菜を作るのを手傳て下さつた、その中に睦子さんへ行つた二群が眞赤になつて歸て來た。今日はお畑よりマラソンになつ

てしまひましたのよ」汗ばんだ額の毛をかき上ながら睦子さんも空の箆をふつて見せた。その内ウエフハース三枚と小さいお鹽せんを各自の小さいお皿に盛たのを、百合子さんや秀子さん達が一つ一つ運ぶ、テーブルをかこんで、新鮮な牛乳と、ほどよく出た紅茶が疲勞とまでは行かない軽い疲れと渴を充分に癒す。ベビちやんは小父さんの大きなお膝の上で、目を細くして無心にお乳をのんでゐる。

おばさんは、今朝から人持ち顔のテーブルの上の小包と封筒を取り上げて、「先生、福島から便りが來ました、」思はず「先生」と言て、はつとしたおばさんは、子供達にすまないやうな顔をした、さういふ昔の教へ子（おばさん）の癖や、氣持をよく知つてゐる先生は、

「何がはいてゐるかしら」と箱に子供の注意をあつめてから、何げない調子で「おばさん、お手紙

をよんで下さい、ね、みんなできしませう」

「おちさん一寸その箱かして」と權ちやんは小父さんから箱をうけ取つて、「かるいよ、おもちやぢないぞ」と真面目になつて考へ込んでゐる。「僕にも、「私にも」一順箱が小さい手を渡つた時、おばさんはゆつくり、はつきりした發音で、片假名で記してある方の手紙をよんだ。それには周子さんが、幼い従弟さん達と一處に摘み集めた谷間の姫百合が、無事に武藏野へ着くやうにと書いてあつた。

「あら、すずらん、少女らしい喜びに、睦子さんは「私開けませよう」と箱を受け取た。蓋の開いた瞬間清らかな深山の香が、あたりに流れた。送つた人のやさしい心づくしも、「にほひ、にほひ、おいしい香だ」「バナナのやうだ」子供達は、口々に云ふ。おばさんは、レンガ色をした壺を出して睦子さんに渡した。壺に水の運ばれる間に、おばさ

んが「ては腹に」といふと各自茶わんとお皿を炊事場までそつと運んだ。

「おばさんお手傳ひ」芳子さんと美代ちやんが炊事場で、おばさんの洗つた器を戸棚におさめてゐる。芳子さんのお家の女中は、摘菜やよめ菜を洗つてゐる。

ベビちやんはお睡になつたので睦子さんが東の室のベットにねかして室のカーテンを今閉めたところ。

「お姉さんいゝお天氣だからお人形の着物洗いでしょ、四五人の女兒は小さい洗面器を手にも風呂場へ行く、

「春子さん、ぢや罐の中のラクスを少し皆さんの洗面器に入れといてちようだいね」

睦子さんはすぐ後から、ぬるま湯を持って行つてラクスを溶いた。女兒達は白い泡を立てたり消したり、うれしさうに洗濯をしてゐる。

「お姉さん白くなつたてしよ、こんなに」

「え、芳子さんの、も少しゴシ／＼こすつてごらんなさいな、もつときれいになりますよ」

日あたりのいゝ南側の楓の低い枝から枝へと小さい干物竿をわたして、干物おさへを數だけ風呂場の棚にのせ、睦子さんはベビちゃんのパットをそつと見に行た。

秀子さん泰子さん道子さん達はそのあとで各自の干物をほしあげ、おさへで止めてゐる、若葉をわたるそよ風が、汗ばんだ子等の紅い頬とつやつやしたふりわけ髪をなで／＼行く。

と、いつのまにか加るいいでたちになつた小父さんは鍬を肩に、その前には男の兒等の一群が何か重さうに、「こんどは僕の番」「僕も」とかはり合せて、かついて來るのは、裏の竹林からの掘り出しもの、

「まあ美事な」と笈を賞めるよりも、まづおさん

の母さんの目にうれしかつたのは友達の群に交つて泥だらけの手足をし、めづらしく上氣した我子の頬、何かたのしげに隣の子と笑みかはしてゐる様子だつた。

「まあおぢさまのおかけ様で、戀人の安も土の子になれました」

「ハハ、ハ、土の子ですか、安んさはこうして一月もおつづきになれば見違へるやうに健康になりますよ」小父さんの言葉には豫言のやうな力強さがあつた。

「皆さん、もうぢさお晝よ、いまベビちゃんが睡てゐるから、しづかにお仕度していらつしやいな」睦子さんの言葉に、皆黙てうなづいて、流れの方へ急いで行く、「僕、おぢさんとだ」年弱の進さんは、子供のやうにくぼみ出る肉付のいゝおぢさんの指一本にかぢりついて悦に入てゐる。

片手に鍬を下げておぢさんも流れの方へ行かれ

る。

あとで、百合子さん、芳子さん達は晝食のテーブルのお手傳をする。

流れから歸つた子等は各自手拭を浴場にかける、おばさんはみんなのはちきれさうな、つややかな頬をながめながら、「お身體も拭いて？ 汗になつたシャツは盥の中に入れていらつしやい、洗たのが棚の上にあるから着てね」

身も心もさばくと、定まつた席につくと、テーブルの上には、大皿に赤の御飯の小さいお握りがつてある、各自の小皿に午前に摘んだ、つまみ葉のおしたし。少さい箱にぎうづめの御飯は味がわるいし殊に冬は、炊き立ての方が、あいしいし、手間はわづかだからといふおばさんの心盡しに、此の園の子等は、晝はいつとも出来立てをいたびく事になつてゐる、副食物は各自の嗜好もあるので、家庭から持て来る。

「今日は權ちやんのお誕生日、これはお母さんとおこのおばさんのお心入れてすの」「おあ、權ちやんから」睦子さんのとりまわしが、すむと、おぢさんが「權ちやんおめでたう」「みんなも」「おめでたう、く」「祝辭をあびて少し當惑氣味な、權ちやんに、おばさんは小聲で「ありがたうは」はつきりした語調で「ありがたう」と返した權ちやんはやつと吾に返つたやうな様子で「おぢさん、おらあんとこで握たやつ喰つた？」と問た、「今朝から權ちやんはおぢさんにごちさうするんだつて楽しんで居ましたの、よかつた事ね、思た通りおぢさんが来て下さつたから」

この時ベッドを滑り下りた、孝さんは、カーテンをくぐつてすたくと皆の方へ出て来た、

「まあ、お目々さめたの、一寸ごめん下さい」。用を足させてから席にかへつた睦子さんは「さあ、あなたも一ついたゞきませう」おむすびをスプー

ンてくづしては蕾のやうな口にふくませた。

「これはいゝ香りのつまみなですわね」「あぢさんの
お好きなのも摘みました」

「さうでせう、どうもつまみなばかしてはないと
思ひました、まだよめながこんなに柔かですか」

「少し育ちましたけどこれは芽のところだけつみ
ました」

「今日のオムレツはブリモースの卵でございます
が、いかゞでせう？」

「市内のは生み立と言てもかうはいさませんね」

たのしいさゞめきのうちに食事が終つた。各自
は自分の食器を、さうつと臺處にはこんで、湯呑を
持て風呂場にまわり歯ブラシを使つてゐる。その間
に食事の當番は臺所で、あばさんのお手傳をする。

男兒達は木製の椅子を片づけて、窓際のソーフ
アに椅る。

さつきからレコードを選つていらしたあばさ
んは、ソーフアの子供等に「何がいの？」と問
はれた、「朝がいの」「僕も朝だ」

「森の鍛冶屋がいの」

その中、炊事場の方も片づいて皆廣間に集て來
る。

「あぢさん、あとでスプリンググングして頂戴
ね。」泰子さんがあぢさんの耳の端に行てさゝやい
た。兩側の小室の幕もあけはなして、ベビちゃん
明さんは睦子さんとベッド兼ソーフアの上に、あば
さんは安さんの母さんと、睦子さん、少し孝さん
あづかりませう」とベビちゃんを膝にとつて皆が
思ひ／＼の席につくと、レコードがしづかにまわ
り出した。外にはまひるの陽が、新緑に反射して
あたりは夢の國か、おとぎの國のよう。

だん／＼レコードの廻るにつれ、午前のかるい
疲が出た子等は、腕をくみ合たり、椅られたりし

ながら、うとくと假睡に落ちて行く、小母さんは、さうとその上に軽い毛布をかけ、後の開き窓をしづかに閉めた。

泰子さんのおたのみのスプリングソングの頃にはみんなほんとうに夢國に遊んでゐた。

ベビちゃん丈は陸子さんにつれられて芝生の方歩きまわつてゐた。小母さんや、安さんの母さん芳子さんの女中さん手傳つて浴場では小さい人達のシャツ洗濯がはじまる。

午後の日が斜に、雑木林にさす頃、思ひ／＼の押花や押葉を作た子等は、おばさんに厚い御本を出して頂いて押しをしてから、みんな芝生でおちさんを圍んで、お約束のおはなしを催促する。

年長の芳子さん、泰子さんが芝生の上で、紅と白のれんげつなぎをしながらベビちゃんや明さんと遊んでゐる。

「今日は外でお茶にしませう、ねおばさん」陸子

さんはさう云ひながら牛乳とお茶の薬罐をさげて来る、百合ちゃん道子さんも、さうつとお茶碗を運んで来る。

雑音のない自然の天地、梨の花訪ふ、あぶの聲がブーンと静かな空氣にひびいて来る。

「あ、兄さんが来る、こつちだよ」権ちちゃんは起ち上つて手をふつてみせる。「まあ、ほんとうに目ざとい権ちなんだ」と陸子さんは獨語のやうに云た。「兄さん」と呼ばれるのは近くの〇〇學園の音楽の教師で、大變子供好きなところから専門外の幼兒研究に志があつて、學園の時間があきの時には一寸でもこゝへ来て子供達のよいお友達になるのであつた。「目ざとい」と陸子さんにはれた権ちちゃんは、こればかりではないどの方面にも正しい直感の出来る子で、父親がこゝの村長なので出入の者も多く、田舎育ちで粗野な言葉使ひではあるが、單純に物事を考へて卒直にする行爲が、

おばさんや其他の大人にとつては驚きであり喜びである、同時にそれが此園の主張に一致し、村長である父親も此園の教育方針に賛成して、是非親子をと託してあるのである。

「兄さん、又踊りたいな、弾いて」「あ、弾いて弾いて」

お茶がすむと、子供達に促がされて兄さんはピアノの前に坐つた。

「何にしよう？」

「兎がいゝ、それから汽車も」

兄さんの弾くのは曲で、唄ではなかつた。子供達は音のリズムを聞いてそれを思ひ／＼の形のリズムに表して行た。フォルテの時には全身、つまさきから頭まで思ひつきりな運動をし、ピアノシモの時には殆ど不動に近い運動をする事はこの園の子等は上手でありまた大變好きであつた。

「兄さん運動しよう！」

男の兒達が先立になつて促した。在來の幼稚園で、ともすると遊戯といふものが男の兒にさらはれるのに、この園の音楽と運動は、時には踊りになつたり、競走になつたり、兄さんを見ると必ず子供達はしなくては氣がすまない位である。

廣間の鳩啼き時計が三時を告げた頃、少しくたびれたやうな明さんの顔を見て、おばさんは、

「お家にかへりませうか」

と云た。百合子さんは、「おばさん笛の皮いつむくんですの？」

と心配さうに。「さうさう。皮をむいて頂きませうね、さうすると今晚一夜水につけられますからそして明日御飯にませうね」

皆は炊事場で、さつき掘た筈の皮をむきはじめた。

それが終る頃玄關にはお迎ひの人が大部まつてゐる。子供達はめい／＼に歸りの用意をした、お

ばさんや睦子さん、小父さんも兄さんも入口まで送て行く、

「さよなら〜」またあした、さようなら」

ふりかへり〜帽子をふりながら省線電車の停留場の方へみえなくなつた。

この幼稚園の趣意の一部を、ぬきがさしますと。

『近代の人間はあまりに、智恵の實のみを食べ過ぎた、智育偏重の教育を受けた現代人は肉體と精神の均衡を失ひ自ら生活の幸福を失ひつゝある、人間は精神のみの教育では完全にはなれない、體が弱いと精神活動が充分出来ない、故に精神活動の自由を得んが爲に神経作用の研究に基いた特種な體育的訓練を要する、今假に精神と肉體との發達が完全に調和し得たら其て人間は幸福を得るであらうか、人間は宇宙、自然と關係なしには一日も存在を許されない、即ち自

然に全く融合する事が出来て始めて眞に幸福を得る事が出来る。

なほ、幼兒教育の場所として最も注意を要する事は混雑と雑音を避けたい事で、廣い庭や、自然の中で靜に充分遊ばせたい願から定員を少なく(二十人)限定しました。』

つばなの語た「或幼稚園」は、晩春の野にさくつばなが、夢のやうに見た幼稚園である。しかしそれは現在に實在せずとも、すぐ次の現在に實現し得る可能性を持たものである。

強い念願は實現にまで到達するものではないか。この或幼稚園では唱歌を教へてはゐない、けれど唱歌を扱はないのではない。よめなを摘みながら、落花をつゞりながら幼兒は何かふしづけて、口づさむてゐるではないか、幼兒から、學ばう、幼兒から發見しようとする所に長い時を要するのである。(一九二八、四)